

即位礼正殿の儀と大嘗祭を控えての断簡 元拓殖大学教授池田憲彦

11月14日から15日にかけて斎行される大嘗祭は、政府関係者の諸発言を見ると、10月22日に斎行される即位礼正殿の儀より軽視されているかに見受けられる。現行憲法の解釈学からすると、前者は公的な性格のある皇室行事、後者は憲法1と2条の定めによる即位だから国家行事になる、と言う。

次第を見ると、後者での儀礼には踐祚における剣璽「渡御」（今は「承継」という）で奇妙な工夫がされた。4月30日から5月1日に間を作る工夫で、尤もらしい理屈をつけて渡御を妨害したから。浅知恵は、譲位を退位と言いくるめるところから始まり、猛威を奮った。この種の小癪な作為は、憲法解釈の字句に拘泥し、しかも優先して、皇位と皇室伝統を軽視するところに発している。

今日に至った御代替わりの諸儀礼には2つの流れがある。即位儀礼の多くにはシナ文明での王権継承の儀礼の影響がある。一方で、大嘗祭は古来の幽顕一体にある神道の簡明な本質を活かし、神々と共生し寿ぐ儀式である。漢風は、今で言うグローバル・スタンダードであり、他方は守るべき祖宗伝来の古儀であった。斯く日本文明は試行錯誤を重ねての知恵を徐々に築き、磨いてきた。

現行の並立スタイルは、憲法をベースにして権威化を図っている。だが、日本の国柄やそれを自覚して築いてきた即位の諸儀礼の総体を考えると、漢風とは無縁な古儀の性命を継承してきた大嘗祭の方が、古（いにしえ）から、皇位を含む祭祀を遵守してきた関係者には重要であった、と見做すのが妥当だ。

こうした併用による同時進行に見られる在り方の背景にある発心こそが、千三百年前に原型のできた皇位継承の祭祀を今日に継承させてきた精神力であった。690年から91年にかけて持統天皇の御代に制定された、大嘗祭の原型にある日本文明の輪郭作りの外延には、伊勢神宮の式年遷宮の開始がある。この2つの祭事こそ、最優先してこれからは双方を民意として継承させることが、日本国内だけでなく世俗化の進む世界の惨状への貴重なメッセージになる。茅葺きの大嘗宮の設営など、営々と継承させてきた思潮と軌跡の史実が、どれだけボーダーを越えて、日本文明への新鮮さと感動をわかる者には与えてきたか。

現行憲法解釈で成り立つ「戦後保守」に拘束されて不思議としない今の政官選良ら？には、こうした視座を受容する見識は極めて薄い。690年に始まった式年遷宮を想起し神宮の神前に立っても、何の感興も起こらないのだろう。そうした感受性の薄い手合が官邸と宮内庁を我が物顔で跋扈し、宮中祭祀に尤もらしく介入し、憲法から「公的性格」の有る無しを判定する倒錯した暴挙を展開している。占領中にGHQ宗教課の係官が祝詞の一言半句に介入したのと同じ。脳皮にシワのほとんどないつるりとした官邸の住人らには、日本文明の在り様についての先人の積み重ねの持つ意味のわかる余地は薄い。やんぬる哉、か。